

鎖国体制についての二・三の問題

堀 叡

一、はじめに

鎖国という狭義では寛永十六年（一六三九）ポルトガル船の来航を禁止し、同十八年（一六四一）オランダ人を平戸から出島に移したことに由来し、完成したと考えられている。また幕藩体制の一環という考え方から、国内体制の整備との関連で寛文年間（一七〇一～一七〇六）の体制ができたという論がある。そして、もっとも広く考えれば、一八五三年のペリー来航までを鎖国とすることももちろんできるのである。本稿では、二百数十年にわたる期間の全体を鎖国体制と考える立場から考察を進める。もとより長年月の間には種々の状況変化があり、したがっていくつかの段階を設定することが可能である。寛文期もその一段階に過ぎないのである。本稿ではとくに十八世紀末から十九世紀初頭にかけて一つの段階を考えている。要するに全体を通観しなければ、鎖国体制の本質はつかめないし、また時代を経るに従って四囲の状況変化により、徐々にその本質があらわれてくる面もあるかと思う。また寛永鎖国の時代から厳格な体制が布かれていたとは必ずしもいえないという史料もある。角倉・末吉・平野の豪商達が朱印船貿易の復活を

働きかけたという文書が発見されている。（朝日新聞、一九八〇年十一月二十三日付紙面による）これまで外国との関係そのものである鎖国の研究自体が日本の方に視野を限定して、日本の立場からのみ行われてきたことは反省すべきことである。この傾向は日本史の他の分野にもみられる。将来は比較史というよりもオランダ史・スペイン史・ポルトガル史・朝鮮史・中国史の研究成果の摂取や、さらに進んでは日本史研究者自身がこれら外国史の研究に立ち向う必要もあるのではないか。筆者が現在感じている鎖国制に対する疑問を二、三あげることにする。

(1) 通常鎖国の形成過程を説明する場合は、幕府の法令を並べて解説するという方法がほとんどであるが、立法趣旨を示すような史料（たとえば当事者の記録など）がないものであろうか。毎年しかもほぼ同じ時期に触書が発せられる理由についても説明されていない。

(2) 一六三五年、日本人の海外渡航がすべて禁止され、その結果として南洋日本町がすたれて行ったことは事実であろうが、しかし一方では日本町そのものが現地に容れられない面もあったのではなからうか。シャムの日本町はこの発令以前に焼打ちされている。日本人の海外定住が現地勢力との関係で、すでに破綻していたことも十分考えられる。今後は華僑との比較などの観点から考察されるべきである。

(3) ふつう一六二四年のスペイン船来航禁止は比較的軽く扱われ、一六三九年のポルトガル船来航禁止は重くみられる。日本と

の過去の貿易その他の交渉からみてもそうなる必然性はあるが、ヨーロッパの国際政治史からみれば、十七世紀初頭から一六四一年ごろに至るまでの期間は、スペイン王がポルトガル王を兼ねた時代であり、スペインの優越、ポルトガル従属の時代である。かつてのスペインの強勢をもってすれば、幕府の来航禁止措置など無視されるべきものであったに違いない。時はちょうどスペイン・ポルトガルの衰退、オランダの登場という新旧交代期に当たっていた事実が、鎖国が実現した最大の条件の一つであったのではないか。

(4) オランダはインドネシアを植民地化したのに、なぜ日本をそうしなかったのか。また台湾などではキリスト教布教の意図もあったといわれる。そしてシャムではポルトガルとオランダはともに侵略の意図がない国と評価され、ほかの国はしめ出したが両国の来航は許していたというが、(西野順治郎『日・タイ四百年史』、時事通信社、による) 日本におけるポルトガルの方針とどのような異同があるのか。

以上思いつくままに素朴な疑問を並べてみた。以上のいずれの場合も明快な解答を用意しているわけではない。本稿ではもとより才能および紙幅に制限があるので、少数の問題について私見をのべる程度に止めたい。

二、朝鮮との通交

江戸時代に日本とただ一つ国交を結んだのが朝鮮であった。そ

れは事大ではなくて隣交であり、対等の交際であった。しかも朝鮮は明・清と冊封関係にあるほかは厳重な海禁政策を行い、それは日本の鎖国体制と似た点が多く、朝鮮の諸政策が日本の政策の先例であったかも知れないのである。時代は少しさがるが、正保元年(一六四四年)正月に幕府は南蛮船のことを対馬藩をして告げさせた折、同年四月に礼曹参議李行遇は宗義成にあてた書状中に次のようにのべた。¹⁾「再び告るに南蛮船を伺ひ捕ふるの事を以てせらる、但我国の南蛮に於る其海を隔る万里に過たり、前代よりして未其船舶来往の事あるをきかず、我朝に至て謹て其界を守り敢て他国と貨を通せず、その或は風に漂ひ来り泊するもの唐船及び貴地の船に過すして、若其漂泊の事有時ハ随て是を搜り送り、暫くも停むる事を許さず、是貴州の明らかに知れる所也、且我国礼義を以て俗をなしてかの異術の我民を眩惑する事を許さず、且海に近きの所辺臣をして常に是を搜り、其竊盜を防しむ：若果して示す所のことくむは、我国に在ても亦其侵盜の慮なくむは非ず、よりて沿海の兵鎮に命して是を伺ひ、厳く防備し、若異様の船我界に入ることあらハ速に是を捕へ釜館に縛送せしめむ(後略)」和文訳を引用。これをみても、外国船に対する処置、キリスト教に対する態度など日本の方針に通ずるものがみられる。右の文中にみえる釜館は釜山港の倭館をさすが、外国に対する交易場の制限は「中国では市舶司の制として古くからあり、日本人が往来する地点は明州(寧波)にかぎられていた。朝鮮の三浦、近世の釜山(日本に対する)・会寧(清に対する)などの例

がある」と田中健夫氏は指摘している。²⁾さらに私見を加えれば、北京と広東、京城と釜山、江戸と長崎というように首都と開港場を遠ざけようという意図もうかがわれる。日本の場合、京都と大宰府のごとく古代以来の歴史的伝統も考慮されなければならない。そして釜山一港を開くことは、一六〇九年の己酉条約により決定されたことで、日本人が従来と異なり京城に上ることは禁止された。³⁾一六二七年金の太祖は朝鮮と戦い(丁卯の乱)、翌一六二八年江都會盟が成立した。その内容は両国の地位を対等とし、会寧と義州における春秋二期の開市をきめ、さらに国境に無人の間曠地帯を設けることになった。この国境問題は大変興味深く、この原則を朝鮮と日本にあてはめれば、島を無人化して緩衝地帯を作ることになるが、のちにのべる鬱陵島問題は朝鮮の無人島政策を日本側が理解しないでおこったのである。(ここで思いおこすのは、江戸末期に小笠原諸島を空島化したことであるが、朝鮮との問題ないし領土政策が影響を及ぼしたかどうかは現在のところ不明である。)ところで己酉条約の結果おかれた釜山の倭館は一種の居留地であった。外国人に自由な国内旅行を許さず、居住地区を限定すると、ほとんどの場合治外法権の問題がおこるの回避は避けられないのである。倭館もその例外ではない。享保十三年の「雨森東五郎書上」には「館内へ朝鮮人盗に入候時、急度死罪に被付候様にと、毎度館守より任訳申渡し候ても、其通に不被取行、落着いひしらけに成候事有之候。元来盗にも軽重有之候処、其差別無之是非死罪に被行候様にと申候へは、此方の無理にて御

座候。交奸之もの彼方にて被致死罪候へとも、此方にては永々流罪被仰付候同前之事にて、国々の法式有之事に候故、向後盗も捕候は、縄下に致し、訳官に被相渡、盗之軽重に應じ彼国々法之通被致処置候様にと館守より可被申事に御座候。朝鮮国之内にて盗致し候者は其罪を糺し、館内にて致し候ものは差許候と申事は決して無之事にて……とあり、さらに「深見彈右衛門館守之時、朝鮮の女三人、館内にかこひ置候段相知れ、東萊より催促有之候に付、不得已竊に館内を出し候時、館外にて捕、拷問之上斬罪に行ひ、其相手を被出候様にと名指し致し、督責厳急に候処、館守より色々申はつし、其内に年月も立候て、終に相手不被差出事相済申候。」と伝えている。⁴⁾朝鮮法と日本法のちがいが、犯人引渡しのことなど興味深い記録であるが、このような和館のあり方は、近代に設定される居留地の萌芽的な形態を示していたといえようか。さきに朝鮮との国交は対等であるとのべたが、釜山和館はその重大な例外であった。前近代における日朝間の慣行が、明治九年の日朝修好条規第十款の片務的治外法権の規定に連なっていた点は、先学のつとに説いた所であった。⁵⁾

三、比較鎖国制

それでは鎖国制は日本特有のものであったか。あるいは清国や朝鮮を含む東アジア世界特有のものであったか、という点を考察してみた。朝鮮の鎖国を支えたのは中国との冊封体制であり、オランダは冊封体制ゆえに、朝鮮との通商を断念している。日本

の場合は、東アジア貿易体制の東端に位置していることと、冊封体制の下に組み入れられていないという点がその鎖国制に特色を与えていると思われる。朝鮮は冊封体制ゆえに鎖国を維持しえたが、逆にそれゆえに鎖国をやめることも容易ではなかった。より正確に言えば、清国の圧力によって鎖国を守らざるを得なかったのではなくて、自らその体制を固持し続けようとしたのである。

一方東南アジアではどうかを、永積昭氏の所論に従ってのべたい。⁶⁾一六八八年から一七六七年まで、タイのアユタヤ王朝は鎖国政策を採ったし、ビルマのタウング朝も一六三五年から一七五二年まで鎖国的な政策を行ったという。ジャワのマタラム政権も鎖国指向であったが、オランダの力の前に開国を余儀なくされる。ルソンのような島では、事実上鎖国政策は不可能であったとされる。以上の点で、筆者の研究でつけ加えられることは現在はないが、今後は広くアジア世界の歴史の中で比較研究される必要があると痛感する。ところで諸外国の歴史を比較する上で、ある種の共通項が存在することが想像されるが、その一つに華夷思想がある。中国を中心とする華夷世界の中にいくつかの小華夷世界が成立していたといえる。この時代の朝鮮もこの思想をもっていたことが最近指摘されるようになったが、ベトナムはラオス・カンボジアなど周辺の国家に「小中国」として君臨したといわれる。⁷⁾歴代のベトナム君主は、中国の君主と同様に皇帝と称し、年号を建ててきたが、とくに阮朝の盛時にはみずから中国と称し、清朝はただ北朝あるいは北国、清国と呼んでいたという。さらに

清朝との外交関係も朝貢とはいわないで「邦交」と称した。⁸⁾これに対して日本では、オランダ人について『徳川実紀』は「蘭人入貢」と記し、「貢物品々奉る」という。また琉球人の来朝には『徳川実紀』や『通航一覧』において入貢ということばで表現している。これに対して朝鮮人に対しては「韓人来聘」といい、観念的にも対等の交際であった。もちろん華夷思想を持っていた相手があることであり、実力がなければ内容は空疎なものとなる。オランダ人はかなり卑屈であったが、朝貢をしているとは考えてもいなかったであろう。ついでにいうと、日本における鎖国体制の研究は、教科書などにもみられるように「オランダに貿易を許した」などという表現が多いが、研究までが華夷世界的であるばかりが多いように思う。要するに日本の歴史の研究を日本中心に、日本のみで行う傾向が強いのではないか。反省すべき点だと思われるのである。

四、領土問題

正保元年（一六四四）、幕府は国郡絵図の作製を企てた。これに先立ち慶長期にすでに作られたことがあるが、正保のさいは日本全国を一里六寸（二一六〇〇分の一）の縮尺に統一し、道や海路を赤い筋でひくなどの特色がある。さらに元禄図になると領土の所領別の記号などが消えて国郡図は完成したと指摘されている。⁹⁾黒田氏もいわれるように「江戸幕府こそが日本全国の国郡制的把握と国郡の境確定の主体たること」を示すものであろうが、

筆者には正保元年に先立つこと数年前に成立した鎖国との関係が念頭に浮ぶのである。というのは海禁を実行する以上、国家の領土の画定が必然的な前提となるからである。国民の海外渡航が全面的に禁止されたからには、国内とはどこまでか、海外とはどこからか、をはっきりさせておかなければならない。中世ヨーロッパの普遍的支配者であった神聖ローマ帝国と対抗関係にあったフランスの場合、世俗国家として主権の支配領域である国境を嚴重に画定したという。¹⁰⁾一向一揆やキリシタンなどの精神的支配をたちきった世俗権力としての幕府が、外国との関係においても日本の領土を画定することに迫られたことは当然であろう。なお、朝鮮では国境侵犯にとくに意を用い、京城の南山にのろしの集約点を設け、釜山より昼は煙、夜は火で急を通報したという。¹¹⁾海禁に関しては朝鮮の方がより徹底した方針を実行していたようである。そして朝鮮との関係では、領土問題が現実におこっている。すなわち鬱陵島問題であるが、この島は中世以来いわゆる空島政策を採用して無人であったが、日本ではその事情を知らずに入島したため領土問題がおこった。「いはゆる磯竹嶋ハ是我国の鬱陵嶋也、慶尚、江原両道の海中に在て、載せて地図にあり、新羅・高麗の時より其貢物をとるの事あり、我朝にいたりて又逃民をあらため出すの事有、今廢し棄れりといへとも、他人の抛り居るを許し、以て両間の事端をひらかむや」と朝鮮は主張し、「貴嶋の我国に来往する唯釜山一路を除くの外皆海賊を以て論断せり」と対馬の宗氏に通告してきた。¹²⁾結果は元禄九年（一六九六）、日本

は朝鮮の領有を認めてこの問題は落着いた。「大猷院殿御実紀附録卷四」によれば、「甲斐庄喜右衛門正述長崎奉行命ぜられしとき御前に召、本邦の事は当家にまれ他家にまれ、とるもとらるゝもおなじ国中の事にて一分の耻なり。もし外寇の事有て、寸地なりとも辺境を掠られんには、是日本の耻といふものなり。さらば長崎奉行の職は大事なれば、よくこゝろゆるびなく、おごそかに慎むべしと、かへすぐ仰せられしとぞ」とある。¹³⁾將軍家光の国家領域に対する関心が察せられる。

五、「開国」と「鎖国」

鎖国ということばは、周知のようにケンペルの『日本誌』を訳した志筑忠雄の『鎖国論』（一八〇一年）にはじめて用いられた。ではなぜ十九世紀の初頭にこのことばが出現したかを考えてみたい。志筑自身『鎖国論後書』の中で、次のようにのべている。¹⁴⁾「今かの魯西亜人が大に其国を開きて、北は氷海に界し、西は波羅泥亜（ポロリアーポランドのこと、筆者、以下同じ）、蘇爾祭亜（スウェジャールスウェーデン）に通り……とロシアの勢力圏拡大に注目する。また本多利明は『経世秘策』補遺において「属島の開業」というのは、日本附之島々を開きて良国となすべきをいふ。……抑開業といふは、船を遣て其島々北極出地を測量し、土地之幅員を測量し、自然土産を料り、土人之員数を料り……」という。¹⁵⁾すでに享保初年に並河天民は『關彊録』において「北奥州松前ニ統候蝦夷国ヲ御開被遊候而日本国ト一ツニ被遊ヘキ」と主張したが、¹⁶⁾

この国を開くという思想は、十八世紀の末に至って蝦夷地開拓という事で具体化し、日本国に新たに蝦夷地という植民地をつけ加えるという考え方となった。もともとこれには松平定信のごとき反対の思想もあった。かれはロシアとの関係から「蝦夷周囲七百里之國不毛之地、ことに山川堅固に候得者、此姿にて被差置候儀、却而日本之御固にて有之候」と考え、「蝦夷之地を可併など申類、是亦反て辺隙をひらき、後患をのこし可申哉無算束」とのべているが¹⁷⁾。寛政十一年（一七九九）、東蝦夷地の直轄化による蝦夷地経営を幕府では「蝦夷地開国」と表現した¹⁸⁾。さらに『ハルマ和解』や『訳鍵』では、colonyを訳して「開国」としている¹⁹⁾。

以上あげた例でもわかるように、十八世紀の末には、蝦夷地を日本国に編入する、すなわち植民地化する動き、および思想がみられ、それを「国を開く」とか、「開国」と表現したのであった。この新しい動向に対して、江戸時代初期からの体制、すなわち東アジア世界における日本の「海禁」を「鎖国」と呼称するようになったと考えられる。そしてこの動きに対応して、次のような注目すべき事実がある。アイヌ人のうち津軽領に住む人々を日本人の形にして人別帳に登載した事実である。『封内事実秘苑』宝暦六年（一七五六）九月十九日の条によると²⁰⁾、「乳井貢御用ニ付廻郷：：此節外ヶ浜の夷爺那になる²¹⁾」とみえ、『津軽藩旧記伝類』の同年九月朔日条には「乳井貢御用ニ付廻郷：：此時外浜字鉄辺に居る狄ともを皆々人間に取立、髪剃鬢立させ、女狄髪結せ、齒染させ、戸数人別帳へ入、宗旨改め、寺持せ候」と記す。さらに

『封内事実秘苑』文化三年（一八〇六）十月二十七日の条には「蝦夷共不残王民ニ御帰し被仰付、罷下諸役人共平民同様被仰付候²²⁾」とあって、日本国の北端と長い間考えられてきた津軽の外ヶ浜あたりに住む夷狄たるアイヌ人の王民化が行われているのである。

もちろん一八五三年のペリー来航はまぎれもない開国であり、それ以前の体制は鎖国体制に相違ないのであるが、鎖国体制の中でもいくつかの段階があるはずであり、十八世紀末から十九世紀初頭にわたる時期からはいまのべたような段階に入ると思われる。

この事は次にのべる日蘭関係においてもあてはまると考えられる。したがって「開拓」という意味での「開国」（＝植民地設定）が先行し、それに対する従来の国家体制を「鎖国」と呼んだのである、というのがなせ十九世紀のはじめに「鎖国」ということばが出現したかとの疑問に対する解答である。

六、日蘭関係

次に同時期の日蘭関係について考察したい。一体日蘭関係というと、蘭学によるヨーロッパ知識の摂取という文化交流の面が主として考えられ、従来の研究もその視点で行われてきたといえよう。日蘭文化交流史も重要な歴史的意義をもつこというまでもない。当時のヨーロッパの先進的な知識はオランダに集中していたとみてよいからである。しかし一方では日蘭関係の政治史的な面が捨象されてきた傾向も無視できない。とくにオランダの歴史的発展がほとんど考慮されないで交渉史を考えてきたきらいがあ

る。フランス革命に伴い、フランスはオランダに侵入しウィルヘルム五世は一七九五年英国に亡命し、不完全ながらも市民革命がおこるきっかけとなった。パタビア共和国の成立である。ついで一八〇六年にはオランダ王国が成立し、ルイ・ナポレオンが国王になるなどオランダは危機に直面した。大ざっぱに言えば、十九世紀のオランダは近代国家としての歩みをはじめ、近代資本主義国家へと発展したといえる。日本との関係でもっともよくその事実を示すのは、一八四四年のオランダ国王開国進言であろう。その国書の中で、オランダは日本との通商条約締結を勧告しているが、その条約案文中には治外法権など不平等な条項が含まれていた。つまりオランダは西欧近代国家として日本に通商を求めているのであり、少くともその時代以前のオランダ国家と同一視すべきではない。はなはだ素朴かつ周知の例ではあるが、一八六四年（元治元年）の四国連合艦隊下関砲撃事件にもオランダはその一員として参加しているのである。シーボルトが長崎に開いた植物園は、世界的・世界史的にみれば、オランダの植民政策の一環であった。²³⁾ オランダによる日本植民地化の可能性もないわけではなかったと思われる。シーボルトの日本全調査・研究はシーボルト自身の意図とは別にその事を明らかに示していると考えるのだが。これはほんの問題提起にすぎないが、日本の立場からみたオランダのみでなく、オランダ史自体への接近も必要ではなからうか。日蘭文化交流史のみでは、ただきれいごとにと終ってしまい、歴史の実態に迫ることはできないと思われる。²⁴⁾

七、打払令

鎖国令により、清国・オランダ船以外の外国船の渡来は禁止されたから、鎖国初期より外国船に対する措置は当然考えられていたはずである。そして全国的な海警体制の確立を長崎への外交・貿易の集中、対馬・薩摩・松前藩による対外関係の整備と並んで鎖国の完成の条件と考えられたのは中村質氏であった。²⁵⁾ 平戸のオランダ商館日記はこれについて「キリスト教についての厳しい禁令は、断固として発布された。しかし、これを防ぐことが出来なため、ガレオット船の、日本への航海は、禁止された。最近長崎に到着した船も、死刑が宣告された。昨年それぞれの領国の人々に、ガレオット船が、海岸、港に来るのを見たら、これを入港させ、見張りを置き、何か言い分があるなら、皇帝に伝える様、書面で命令した。しかしこの命令を今変更し、その船の言い分は何も聞かず、直ちに沈め、殺す様命令する。」と記す。²⁶⁾ 寛永十六年（一六三九）のいわゆる「浦御法度」は、外国船に対しておだやかな処置を令したものであったが、翌一六四〇年には過激なものに改められている。しかしその後は来航もほとんどなく、オランダの制海権の確立によって鎖国は維持された。しかるに十八世紀の末にロシアの接近がおこるや、幕府は寛政三年（一七九一）九月の触書において次のようにこまかく規定した。²⁷⁾

「総て異国船漂着候は、何れにも手当いたし先船具は取あけ置、長崎へ送り遣はし候儀、夫々可被相伺事に候、以来異国船見

かけ候は、早々手当人数等差配り、先見えかかり、事かましく無之様にいたし、筆談役或は見分之物の等出し、様子相試み可申候、若拒み候様子に候は、船をも人をも打碎き、無貪着筋に候之間、彼船へ乗移り迅速に相働き、切捨等にもいたし候は、召捕候儀も尤可相成候、勿論大筒火矢杯用候も勝手次第之事に候、筆談等も相整ひ、又は見方等をも不相拒候趣に候は、成丈穩に取計ひ、右船をは計策を以なり共繋置、船員等をも取あけ置、人をは上陸いたさせ番人付置、立歸り不申様致し、早々可被相伺候、若及異議候は、捕へ置可被申候、異国之者は宗門之所をも不相分儀に付、番人之外見物等をも可被禁候」

この触書が文化の撫恤令を経て文政の無二念打払令に至る事情については別にのべたので略すが、文政八年（一八二五）の打払令発布の原因として異国船の江戸接近が注目されるのである。松平定信も「しかるに赤人直にも江戸へ来るべしといふは、江戸の入海の事なり。房相二総豆州は小給所多く、城などいふものも少なく海よりのり入れば永代橋のほとりまでは外国之船とても入り来るべし。」と考えている。²⁹⁾ 文政元年イギリス船が補賀に来航したさいは「言語不通、エド、マツマへ、ナンブクナシリ、ヨ、ツカ、タ子ガシマ、ベンカラ、ヨランダ是等の地名は相替り候儀無之、其外相分不_レ申、江戸々と申儀、猶以不安心に付、湊口江碇口させ……と記録され、³⁰⁾ 物を申候而も一向相分不申、ヲロシア・ヨランダ・イギリス・大日本・江戸と申事斗相分申候由……と報告されている。³¹⁾ さらに『沿海異聞』では「文化十年お

しや江申渡書面之趣得と為聞歸帆いたし候様ニ申論、其上ニ（も押而）江戸江参候ハ、打払可申候」とみえ、³²⁾ 異国船の江戸指向に對する防衛策は打払う以外にないことが察せられる。しかし当時の帆船の航海技術によっては、確実に江戸に達することは容易でなく補賀あたりに着岸することはまれであった。

フエートン号事件に象徴されるように、十九世紀初頭にオランダの日本近海における制海権は弱まり、かわって寛永鎖国以来の海禁令が登場することになった。鎖国体制は日本自身の力によって守らざるを得なくなったのであり、これが本来の鎖国体制の姿であったといえよう。

天保十四年（一八四三）十二月四日、さきにルソン島に漂着した陸奥国の六人が乍浦の商船で長崎に送りがえされたさい、長次郎・喜兵衛らは香港に滞在したときの見聞につき次のようにのべている。³³⁾

「此島にてイギリス飛脚船と申もの一覽仕候、船の長サ十七八間も可有之、左右に車の輪を仕掛け、船中大釜に熱湯を沸し、其蒸氣にて車を廻し、海上を走り行こと飛鳥も不及程神速に御座候、ヒョンコンより舟山まで八九百里の処、三日に往来仕候を拙者とも面り見請申候、本国之都ロンドンへ注進之節者一萬三千里の海上を十四五日に往来仕候由承り申候」と。この時から十年後の嘉永六年、ペリーのひきいる蒸気船の艦隊が浦賀に至り、帆船によって支えられてきた日本の鎖国体制はもろくもくずれ去ったのである。

八、終りに

最後にしめくくりとして、鎖国体制を支えた条件は何であったかを考えたい。まず自然的な条件としては、日本列島のおかれた位置である。太平洋の荒波、とくに黒潮の流れは首都江戸を守ってくれた。実に現代でも、日本をとりまく海は何十個師団の軍隊に相当するという評価もある。つぎに科学技術的条件として鎖国時代は帆船時代であったという点も見逃せない。帆船では黒潮を横切って江戸湾に入ることは不可能であった。第三に日本をめぐる国際関係であるが、東アジア世界では清、朝鮮ともに海禁政策をとり、日本もそれにむしろ従ったともみられる。ヨーロッパとの関係では、極東水域におけるオランダの軍事力の圧倒的強さの存在である。その制海権は十八世紀の末に弱まったが、ロシアの発展段階に助けられて、日本の防衛は異国船打払令程度でまかなうことができた。それにしても世界的に植民地化が進行する時代に、どうして日本は植民地化を免れたのであろうか。それは経済的な発展、鉄砲などの火器のある程度の装備およびそれらを扱う能力、三千万に達した人口、その上国民の読み・書き・そろばんによる能力の程度、要するに抽象的にいえば国力の充実が侵略への防壁となったであろう。その力は幕末の開国期にも認められ、独立を保持することができた。江戸時代の、現代からみた重さを再認識すべきだと思う。

注

- 1) 『朝鮮通交大紀』、二五一ページ、名著出版
- 2) 『中世対外関係史』、二七一ページ、東京大学出版会
- 3) 中村栄孝「己酉条約再考」、『朝鮮学報』第百一輯、四八ページ、昭和五十六年十月
- 4) 『通航一覽』第三、四六九～四七一ページ、清文堂出版
- 5) 田保橋潔『近代日鮮関係の研究』上巻、四八九～四九〇ページ、藤村道生「朝鮮における日本特別居留地の起源」、『名古屋大学文学部研究論集』、35史学12)
- 6) 永積 昭『アジアの多島海』、『世界の歴史』13、一九一ページ、講談社
- 7) 大澤一雄「阮朝皇帝の対外認識」、『山本達郎博士古稀記念、東南アジア・インドの社会と文化』上、二七〇ページ、山川出版社
- 8) 和田博徳「越南輯略について」、『史学』第四十四巻四号、三田史学会、一九七二年四月
- 9) 黒田日出男「境界の色彩象徴」、『増刊号「色」、昭和五十七年六月、七六～八一ページ、ポラ文化研究所
- 10) 長尾龍一「国家の定義」、『思想の科学』四ページ、一九八二年六月
- 11) 田代和生「寛永六年（仁祖七、一六二九）対馬使節の朝鮮国『御上京之時毎日記』とその背景（三）」、『朝鮮学報』第百一輯、七六ページ、昭和五十六年十月
- 12) 『朝鮮通交大紀』一九九ページ、名著出版
- 13) 『徳川実紀』第三篇、七三四ページ、吉川弘文館。なおこの事の実偽については、中村薫「鎖国前夜のヨーロッパ」の注⑥『中世日本の歴史像』三八七ページ、創元社）を参照されたい。
- 14) 小堀桂一郎『鎖国の思想』、一四〇ページ、中公新書
- 15) 『日本思想大系』44、四四ページ、岩波書店
- 16) 北海道行政資料課所蔵、海保嶺夫『近世の北海道』二二六ページ、教育社歴史新書
- 17) 『日本財政経済史料』第四巻、一二二五ページ、守屋嘉美「松平

- 定信の北地防備策と東北諸藩」(『豊田武博士古稀記念、日本近世の政治と社会』、三四四ページ、吉川弘文館)
- 18) 『松平伊豆守殿御口達書』、海保嶺夫所蔵、同前一四四ページ
杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』Ⅲ、六八八ページ、早稲田大学出版部
- 20) 弘前図書館所蔵、榎森進「和入地におけるアイヌの存在形態と支配のあり方について」(『蝦夷地・北海道』三〇三ページ、雄山閣)
- 21) 『みちのく双書』第五集、青森県文化財保護協会編
- 22) 21)とともに20)の同書所収
- 23) 赤木昭夫『蘭学の時代』二一四～二一五ページ、中公新書
- 24) さらにつけ加えるなら、オランダは太平洋戦争のまぎれもない敵国であり、極東軍事裁判の原告ないしは裁判官として「文明」の名において日本を裁いた当事国でもあった。
- 25) 「島原の乱と鎖国」(『岩波講座日本歴史』9、近世1、二五三ページ)
- 26) 永積洋子訳『平戸オランダ商館の日記』第四輯、三八六ページ
- 27) 『通航一覽』第八、四四四ページ。寛政三年の令が寛永の令以後の最初のものであるという点に関しては、すでに『徳川十五代史』の編者が「是寛永以後異国船取計方ヲ令スルノ始メ也」とのべている。(注17)の同書、三四三ページ)
- 28) 堀 毅「文政の異国船打払令をめぐる諸問題について」(『桐蔭高専研究紀要』第3号、一〇ページ以下)
- 29) 『宇下人言』一六七ページ以下(岩波文庫)
- 30) 『古事類苑』外交部、一三八六ページ
- 31) 「イギリス船浦賀漂着一件」(『浦賀奉行所関係史料』第二集、三三四ページ)
- 32) 『浦賀奉行所関係史料』第四集、二三八ページ
- 33) 『通航一覽続編』第一、一二六ページ、清文堂出版
- (付記) なお、本稿の内容の一部については、昭和五十七年六月四日の東京工芸大学厚木市民教養講座でのべた。